

工藤 四代治（くどう・しよじ）

1、プロフィール

県内外の文学碑の旺盛な採拓活動をなした拓本研究者。拓本の歴史から正確な採拓の方法、文学碑マップ作り等、拓本に関し幅広い業績を残す。又「去来句社」設立の俳人。詩人。

<生没>

1909(明治 42)年9月1日～1984(昭和 59)年9月 26 日

<代表作>

『青森県の文学碑』『拓本の正しいとり方』

<青森との関わり>

南津軽郡山形村温湯(現黒石市)出身。少時に一時青森市に、昭和 14 年～20 年まで中国にいたが、それ以外は黒石在住。

2、作家解説

大正 11 年(13 才)頃から詩作を始め、昭和 2 年(18 才)より津軽病院(現黒石病院)に勤務の傍ら、「揺籃(ゆりかご)」「地下室」「三角塔」に参加、その後一戸謙三らの詩グループに属する。昭和 4 年(20 才)結婚。6 年(22 才)に長女誕生。その頃山田諒三郎と詩誌「空間」を出し、又自らの編集で「海艦車」を発刊、蕪木邑人のペンネームで、やわらかな情感溢れる詩「春」「径」「風」等を発表した。10 年から黒石新報の文芸欄を担当。9 年に長男、11 年に次男、13 年に三男が誕生。14 年(30 才)に中国に渡り、華北運輸株式会社に就職。敗戦の年の 2 月まで北京に居住した。この中国滞在中に、中国人の専門家から拓本の技術を学び、戦後の拓本研究の契機となった。帰国後は黒石に帰郷し、29 年(45 才)「去来句社」を設立、号を青蛾とし、句誌「青樹林」を刊行した。30 年(46 才)から 56 年(72 才)に至るまで、青森県句集に中国滞在に材をとる句と方言句を毎回欠かさず発表、短歌でも「潮音」(太田青丘主宰)等に出詠した。

黒石御幸公園の秋田雨雀、鳴海要吉歌碑建立が中国で得た拓本技術を生かすきっかけとなり、以後旺盛な拓本活動を全県的に行い、青森県立図書館主催の拓本講習会講師や青森県教育厚生会の文学碑めぐりの講師等もつとめた。46年(62才)『青森県の文学碑』(第1集～第2集)、52年(68才)『青森県の文学碑』(郷土双書第9集)を県立図書館から刊行。『拓本の正しいとり方』(私家版)も出し、拓本研究者として名を残す。59年逝去(享年75)。黒石温湯鶴泉にある薬師寺に彼の詩「城愁」が「母へ」と題して表に、「春・径そして風」が「妻へ」と題して裏に、上原隆治作曲の譜面と共に刻まれた詩碑がある。「梢をゆれゆれに風が吹いてます／だから子供はひしと母に抱きついて眠りました」(「風」)彼が残した拓本は「秋田雨雀記念館」等で見ることができる。

3、資料紹介

○『青森県の文学碑1』

図書

1977(昭和52)年4月1日

185mm×130mm

青森県立図書館が郷土双書第9集として発行したもので、四代治の出身地黒石を対象として碑の写真、碑文、解説等が、碑ごとに掲載されている。3部構成で「芭蕉碑」8、「古文学碑」9、「現代文学碑」23を紹介。緒言小野正文。140ページ。